医療法人 山村医院

＜診療科目 内科＞長野県松本市

故郷の人々と音を楽しみたい 信濃の名医は フルートのコレクター

胃カメラは苦しい――そんな人々の持っていた固定観念を、彼の帰郷が一変させた。

「田舎ではね、20年前当時はまだまだそんなイメージでしたよ。だから少しずつ、伝えながら啓蒙していこうと」

山村光久医師・55歳。

内視鏡で外科手術を行う「内視鏡医」として大学の医局に10年勤務。ドイツ留学のちにメキシコの学会で名を残すなど、内視鏡の世界では権威的存在の彼が突如、キャリアを捨て、故郷にこもった。当時、36歳。

傍らには大好きな文学書と、フルートの音色を携えていた。

「本と笛に囲まれて生きる――そんな田舎の医者になろう、って思ったんです」

「山村医院」の3代目院長として長野県松本市の医院を継いだ山村氏。20年間に約2万5千人に胃カメラを行ない、190人の胃がんを診断した。山村医院は大正8年、山村氏の祖父が開業した。

「祖父はもともと文学をやりたかった人。でも身体が弱く、『医者になれ』と言われて、しょうがなく始めたという話を聞きましたね」

琴もたしなんだという初代の趣味を筆頭に、山村家のプライベートは、本と音楽に囲まれた『文系一家』。山村氏も中学2年からフルートを始め、以来、音色に魅せられていった。

経営に興味ない僕だから、プロの山﨑氏に全部任せた。

「ドイツにいたときは、夜は演奏会ですよ。オペラは毎日やってますしね。やっぱり文化が違うなと思いましたね」

医学の傍ら、上質の音に囲まれ時を過ごした海外生活。だが、開業のため故郷の松本市へ帰郷した人生第2幕のスタートは、必ずしも余裕のある日々ではなかった。

「開業時は、お金なくって、笛買うどころか新築資金すら・・・・・・(笑)。そんなとき、アイツが虎ノ門の医療事業団へ一緒に行ってくれて、お金借りるのとか手伝ってくれたんです」

出身校・松本深志高校の同級生で、親友だった山﨑明氏。彼もまた当時、東京・北区に一人で会計事務所を立ち上げたばかりだった。

「山﨑が事務所を開設したとき、王子までお祝いに駆けつけたんです。そのときからまたつながりがポツポツできはじめてね」

山村医院は、山﨑会計事務所にとって『法人化した診療所』の第1号となった。

「山﨑の言うことハイハイって聞いてきただけ。経済、経営に関するコトって僕、ゼンゼン興味ないから。最初は彼も知らないコトあったみたいだけど、ずっと信じてきたね。そしたら今じゃ、あんなに規模も大きくなって、ビルまで買っちゃった。すごい馬力だよ」

山村氏は、語る。

「アイツは酒飲むし、僕は飲まないし、あっちは運動するし、僕はしないで笛ばかり。ゼンゼン違うんだけど、だから気が合うのかも」

そんな山村氏を、山﨑氏は「魅力的な生き方」と見つめる。院長の書斎には、音楽から現代小説、世界史、写真集など膨大な数の本が図書館さながらに並ぶ。フルートは年代ものから希少ものまで、60本を収集。96年の医院10周年や、99年には地元に有名演奏家を招いて演奏会も主催。時には手の込んだ和紙のパンフレットを作り、時には宣伝を行わず600人以上もの音楽ファンを集めた。

「道楽ですよ。白衣ギライなのかもね」

キャリアに背を向けた、普段着の名医。

命を見つめる愛に満ちた笛の音が、ふるさとの山へとこだまする。

医療法人 山村医院
診療科目 内科 ／ スタッフ数 6名　長野県松本市大字今井3223-23